

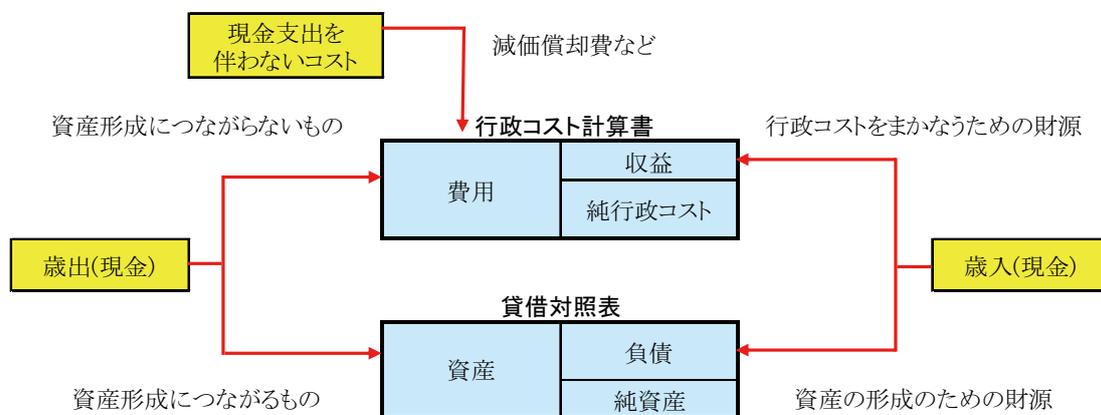
# 第3 企業会計的手法を用いた財政状況の分析について (本県の財務諸表)

## I 作成した目的は何ですか。

現行の地方自治法による予算・決算制度は、毎年度の現金の歳入・歳出の額を示すことが主眼となっていますが、本県の財政状況をより多角的に説明するためのひとつの手法として、民間企業で作成している貸借対照表とともに、損益計算書に相当する行政コスト計算書を作成してきました。

これにより、県の資産や負債などのストック情報や、減価償却費などの非現金支出を含めたすべての行政コストの状況を明らかにしています。

### ※ 行政コスト計算書と貸借対照表の関係



なお、これまで、地方財政状況調査を活用する手法（総務省方式改訂モデル）に基づき財務書類を作成してきましたが、新たに、総務省から複式簿記の導入と固定資産台帳の整備を前提とした全国統一の作成基準が示されたことから、これに基づき、貸借対照表、行政コスト計算書、純資産変動計算書、資金収支計算書の財務4表を作成しました。

### ※ 財務4表の関係(金額は平成29年度)



(注) 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。

## 作成の基準

総務省の研究会から示された作成手法による。

- 1 対象範囲：普通会計（一般会計及び8特別会計）  
（注）水道、病院、競馬などの公営事業会計は含まない。
- 2 対象年度：平成29年度1年間（平成29年4月1日～30年3月31日）  
作成基準日：平成29年度末（平成30年3月31日）  
（注）出納整理期間（平成30年4月1日～5月31日）における出納については、作成基準日まで  
に終了したものとみなす。

## II 行政コスト計算書から何がわかるのですか。

行政コスト計算書は、企業会計における損益計算書に相当するものですが、県の行政は営利活動を目的としていないため、損益計算ではなく、どの行政サービスにどれだけのコストがかかっているかなど、行政コストの内容をわかりやすくまとめたものです。

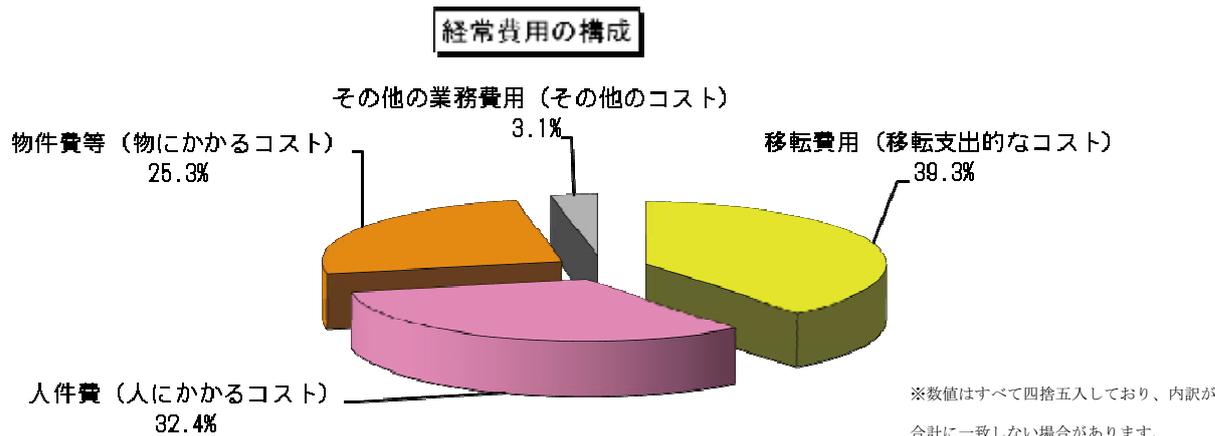
### 行政コスト計算書の構成

- (1) 経常費用：県の経常的な活動に伴い生じるコスト
  - ① 人件費（人にかかるコスト）：行政サービスの担い手である職員に要するコスト  
職員給与費、退職手当引当金繰入額、賞与引当金繰入額など
  - ② 物件費等（物にかかるコスト）：県が最終消費者となっているコスト  
物件費、維持補修費、減価償却費など
  - ③ 移転費用（移転支的コスト）：他の主体に移転して効果が発生するコスト  
補助金等、社会保障給付、他会計への繰出金など
  - ④ その他の業務費用（その他のコスト）：上記に属さないコスト  
支払利息、徴収不能引当金繰入額など
- (2) 経常収益：経常費用の財源として充てられた受益者負担額
  - ① 使用料及び手数料
  - ② その他（財産運用収入、雑入など）
- (3) 純経常行政コスト：経常費用から直接的な受益者負担である経常収益を除いた額で、  
経常的な行政コストのうち県税や国補助金等で賄うべきコスト
- (4) 臨時損失：経常的ではない事由に基づく損失（災害復旧事業費、資産除売却損など）
- (5) 臨時利益：経常的ではない事由に基づく利益（資産除売却益など）
- (6) 純行政コスト：純経常行政コストに臨時損益を加えたもので、行政コスト全体のうち  
県税や国補助金等で賄うべきコスト

### 行政コスト計算書の概況

- ・経常費用の内訳を性質別に見ると、移転費用（移転支的コスト）の構成比が39.3%と最も大きく、以下、人件費（人にかかるコスト）32.4%、物件費等（物にかかるコスト）25.3%などとなっています。
- ・経常費用に占める経常収益（使用料・手数料など）の割合は5.2%となっています。

① 性質別に見た経常費用の状況



平成29年度の経常費用の総額は3,922億円であり、性質別に見た内訳では、補助金や社会保障給付などの移転費用（移転支出的なコスト）が最も大きく、39.3%を占めています。次に大きいのが、職員給与費等に実際には現金の支出を伴わない退職手当引当金繰入額や賞与等引当金繰入額などを加えた人件費（人にかかるコスト）で32.4%となっています。また、消耗品費等の物件費に施設の維持補修費や減価償却費などを加えた物件費等（物にかかるコスト）が25.3%となっています。

経常費用の状況 △印減(億円・%)

	平成29年度 A	平成28年度 B	A-B	増減率
1 人件費(人にかかるコスト)	1,271	1,298	△ 27	△ 2.1
2 物件費等(物にかかるコスト)	991	976	15	1.5
3 移転費用(移転支出的なコスト)	1,541	1,448	93	6.4
4 その他の業務費用(その他のコスト)	120	137	△ 17	△ 12.6
経常費用合計	3,922	3,859	64	1.6

(注) 1. 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。  
2. 平成29年度、平成28年度ともに、新基準で計算した数字です。

② 収益の状況

経常費用の財源として充てられた受益者負担額である経常収益の総額は202億円で、そのうち使用料及び手数料が79億円、財産運用収入や雑入等のその他の収益が124億円となっています。

経常費用に占める経常収益の割合は5.2%となっており、これを除いた3,720億円が県税や国補助金等で賄われる「純経常行政コスト」となります。

「純経常行政コスト」に災害復旧事業費や資産の除売却損益などの臨時損益を加えた「純行政コスト」は3,752億円となっています。

収益の状況 △印減(億円・%)

	平成29年度 A	平成28年度 B	A-B	増減率
1 経常費用	3,922	3,859	64	1.6
2 経常収益	202	229	△ 27	△ 11.7
うち使用料及び手数料	79	79	△ 1	△ 1.1
うちその他	124	149	△ 26	△ 17.4
(差引) 純経常行政コスト	3,720	3,630	90	2.5
3 臨時損失	33	31	2	4.8
4 臨時利益	1	6	△ 5	△ 88.9
(差引) 純行政コスト	3,752	3,655	97	2.7

(注) 1. 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。  
2. 平成29年度、平成28年度ともに、新基準で計算した数字です。

### Ⅲ 貸借対照表から何がわかるのですか。

貸借対照表は、これまでに本県が形成してきた資産（道路、公園など）と、それを調達するために使われた負債（借入金（県債）など）について対比したもので、減価償却費等の企業会計的手法を取り入れて作成したものです。

#### 貸借対照表の構成

- (1) 資産：地方公共団体の財産となっているもの
- ① 有形固定資産：道路、公園、学校などの土地、建物等  
(資産の区分ごとに定められた耐用年数により減価償却（定額法）を実施)
  - ② 無形固定資産：ソフトウェア、特許権等
  - ③ 投資その他の資産：関係団体への出資金、1年以上にわたる貸付金、基金など
  - ④ 流動資産：現金預金、県税等の未収金、1年以内に償還予定の貸付金など
- (2) 負債：資産形成の財源として調達した資金のうち将来返済を要するもの
- ① 固定負債：平成31年度以降に支払義務が発生すると見込まれるもの
    - ・ 地方債：県の借入金の元金（平成30年度償還予定分を除く）
    - ・ 長期未払金：債務負担行為のうち既に確定した債務とみなされるものの支払予定額（平成30年度支払予定分を除く）
    - ・ 退職手当引当金：年度末に県職員全員（県費負担の公立小中学校教員を含む）が普通退職したと仮定した場合に必要となる退職手当総額
    - ・ 損失補償等引当金：県出資法人の負債にかかる県の将来負担見込額 など
  - ② 流動負債：平成30年度に支払義務が発生すると見込まれるもの  
平成30年度償還予定の県債、債務負担行為のうち既に確定した債務とみなされるものの平成30年度支払予定額、賞与等引当金など
- (3) 純資産：資産形成の財源として調達した資金のうち将来返済を要しないもので「資産－負債」の金額
- ① 固定資産等形成分：固定資産等の残高相当額
  - ② 余剰分（不足分）：負債償還のための将来的な金銭必要額（通常マイナスとなる）

#### 貸借対照表の概況

- ・ 資産は、前年度とほぼ同額の1兆6,914億円となりました。
- ・ 負債は、県債の償還に伴う減などにより、0.7%減の1兆3,642億円となりました。
- ・ この結果、純資産は2.8%増の3,272億円となり、いわゆる債務超過には陥っていません。

#### ① 資産の状況

資産の状況	△印減(億円・%)			
	平成29年度 A	平成28年度 B	A-B	増減率
1 有形固定資産	13,677	13,750	△ 73	△ 0.5
2 無形固定資産	8	7	1	12.2
2 投資その他の資産	2,577	2,512	64	2.6
3 流動資産	652	650	2	0.3
資産合計	16,914	16,920	△ 6	△ 0.0

- (注) 1. 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。  
2. 平成29年度、平成28年度ともに、新基準で計算した数字です。

平成29年度末の資産総額は1兆6,914億円となっています。その内訳としては、道路や学校等の有形固定資産が1兆3,677億円で最も大きく、全体の約8割を占めています。そのほかには、投資その他の資産が2,577億円（構成比15.2%）、流動資産が652億円（構成比3.9%）です。

## ② 負債・純資産の状況

負債・純資産の状況	△印減(億円・%)			
	平成29年度 A	平成28年度 B	A-B	増減率
1 県債	12,241	12,248	△7	△0.1
うち臨時財政対策債	3,951	3,927	23	0.6
うち臨時財政対策債以外	8,291	8,320	△30	△0.4
2 県債以外のもの	1,401	1,488	△88	△5.9
負債合計	13,642	13,736	△94	△0.7
1 固定資産等形成分	16,817	16,812	5	0.0
2 余剰分(不足分)	△13,545	△13,628	83	△0.6
純資産合計	3,272	3,184	88	2.8
負債・純資産合計	16,914	16,920	△6	△0.0

(注) 1. 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。

2. 平成29年度、平成28年度ともに、新基準で計算した数字です。

負債総額は1兆3,642億円で、このうち県債残高は1兆2,241億円です。

なお、県債残高のうち約3割にあたる3,951億円は臨時財政対策債（本来ならば国が確保すべき地方交付税の不足分の穴埋めとして発行を余儀なくされている県債）であり、将来、地方交付税で財源措置されるため、県債の実質的な残高は8,291億円となります。

また、資産から負債を差し引いた純資産は、対前年度比2.8%増の3,272億円となっています。

以上のように、資産の額（1兆6,914億円）が負債の額（1兆3,642億円）を上回っており、いわゆる債務超過の状態には陥っていません。

#### IV 純資産変動計算書から何がわかるのですか。

純資産変動計算書は、会計年度中の純資産の動きを表すものです。

##### 純資産変動計算書の構成

- (1) 前年度末純資産残高：平成 28 年度末における貸借対照表の純資産の残高
- (2) 純行政コスト：県の行政サービスにかかるコスト（行政コスト計算書の「純行政コスト」）
- (3) 税収等：地方税、地方交付税など行政コストに充当される一般財源
- (4) 国補助金：国庫補助金の平成 29 年度受入額
- (5) 資産評価替差額：資産額の再評価による損益
- (6) 無償所管換等：寄附など無償受入による資産額の増や無償譲渡による資産額の減など
- (7) 本年度末純資産残高：(2)～(6)による変動の結果による平成 29 年度末純資産残高

##### 純資産変動計算書の概況

- ・純資産は平成 29 年度末残高で 3,272 億円となっており、前年度から 88 億円増加しています。
- ・増減の内訳は、純行政コストで 3,752 億円の減、県税などの一般財源で 3,156 億円の増、国補助金の受入で 697 億円の増、資産評価差額や無償所管替等で 13 億円の減となっています。

#### ○ 純資産の変動状況

年間の純資産の変動状況

△印減(億円・%)

	平成29年度 A	平成28年度 B	A-B	増減率
前年度末純資産残高	3,184	3,039	145	4.8
純行政コスト(△)	△ 3,752	△ 3,655	△ 97	2.7
財源	3,853	3,802	52	1.4
税収等	3,156	3,167	△ 10	△ 0.3
国補助金	697	635	62	9.8
資産評価差額	2	△ 5	7	△ 133.5
無償所管換等	△ 15	4	△ 19	△ 482.8
本年度純資産変動額	88	145	△ 57	△ 39.5
本年度末純資産残高	3,272	3,184	88	2.8

- (注) 1. 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。  
 2. コスト（純資産の減）は負数、純資産の増は正数で記載しています。  
 3. 平成29年度、平成28年度ともに、新基準で計算した数字です。

純行政コストとして 3,752 億円の支出（純資産の減）がありましたが、一方で、県税などの一般財源 3,156 億円、国補助金 697 億円の収入がありました。また、資産評価差額や無償所管換等で純資産が 13 億円減少しました。

この結果、平成 29 年度中に純資産は 88 億円増加し、平成 29 年度末の純資産残高は 3,272 億円となりました。

## V 資金収支計算書から何がわかるのですか。

資金収支計算書は、平成 29 年度中の現金の動きを表したものです。その変動額は、平成 28 年度末の現金預金残高と平成 29 年度末の現金預金残高との差額になります。

### 資金収支計算書の構成

- (1) 業務活動収支：人件費、補助金、社会保障給付など行政サービスの提供に伴う資金収支
- (2) 投資活動収支：道路・学校等の資産整備や、貸付金の貸付・回収等に伴う資金収支
- (3) 財務活動収支：県債の発行・償還に伴う資金収支

### 資金収支計算書の概況

- ・業務活動収支は 213 億円のプラスとなりましたが、投資活動収支は 193 億円のマイナス、財務活動収支は 7 億円のマイナスとなりました。
- ・この結果、資金収支は 13 億円のプラスとなり、年度末現金預金残高は 91 億円となりました。

#### ① 業務活動収支の状況

業務活動収支	△印減(億円・%)			
	平成29年度 A	平成28年度 B	A-B	増減率
支出	3,902	3,820	83	2.2
人件費	1,323	1,345	△ 22	△ 1.6
物件費等	599	573	26	4.6
補助金等	1,439	1,351	88	6.5
その他	542	552	△ 10	△ 1.8
収入	4,115	4,103	12	0.3
税金等	3,453	3,447	5	0.2
国補助金	443	423	21	4.9
その他	219	233	△ 14	△ 6.0
業務活動収支	213	283	△ 71	△ 24.9

- (注) 1. 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。  
2. 平成29年度、平成28年度ともに、新基準で計算した数字です。

平成 29 年度中の支出は 3,902 億円です。その内訳は、補助金等 1,439 億円、人件費 1,323 億円、物件費等 599 億円などとなっています。これに対する収入は、税金等 3,453 億円、国補助金 443 億円などとなり、収支は 213 億円のプラスとなりました。

#### ② 投資活動収支の状況

投資活動収支	△印減(億円・%)			
	平成29年度 A	平成28年度 B	A-B	増減率
支出	816	972	△ 157	△ 16.1
県が行った資産整備	362	350	12	3.3
基金への積立て	120	140	△ 20	△ 14.2
貸付金	331	482	△ 151	△ 31.4
その他	3	0	3	862.0
収入	623	988	△ 365	△ 37.0
国補助金	236	198	38	19.3
基金の取崩し	44	64	△ 20	△ 31.8
貸付金の回収	335	705	△ 370	△ 52.5
その他	8	21	△ 13	△ 62.8
投資活動収支	△ 193	16	△ 209	△ 1,327.0

- (注) 1. 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。  
2. 平成29年度、平成28年度ともに、新基準で計算した数字です。

支出は、県の資産整備のための支出 362 億円、貸付金 331 億円、基金への積立て 120 億円など、合計 816 億円となっています。これに対する収入は、貸付金の回収 335 億円、国補助金 236 億円、基金の取崩し 44 億円など、合計 623 億円となっており、収支は 193 億円のマイナスとなりました。

### ③ 財務活動収支の状況

財務活動収支	△印減(億円・%)			
	平成29年度 A	平成28年度 B	A-B	増減率
支出	857	1,103	△ 246	△ 22.3
県債の償還	857	1,103	△ 246	△ 22.3
収入	851	776	74	9.6
県債の発行	851	776	74	9.6
投資・財務的収支額	△ 7	△ 327	320	△ 97.9

(注) 1. 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。  
2. 平成29年度、平成28年度ともに、新基準で計算した数字です。

県債の償還 857 億円に対し県債の発行 851 億円となっており、収支は 7 億円のマイナスとなりました。

年間の資金収支の状況	△印減(億円・%)			
	平成29年度 A	平成28年度 B	A-B	増減率
支出	5,575	5,895	△ 320	△ 5.4
業務活動支出	3,902	3,820	83	2.2
投資活動支出	816	972	△ 157	△ 16.1
財務活動支出	857	1,103	△ 246	△ 22.3
収入	5,588	5,867	△ 279	△ 4.8
業務活動収入	4,115	4,103	12	0.3
投資活動収入	623	988	△ 365	△ 37.0
財務活動収入	851	776	74	9.6
本年度資金収支額	13	△ 28	41	△ 146.1
本年度歳計外現金増減額	△ 14	△ 5	△ 9	157.8
前年度末現金預金残高	92	126	△ 33	△ 26.6
本年度末現金預金残高	91	92	△ 1	△ 1.1

(注) 1. 数値はすべて四捨五入しており、合計額が一致しない場合があります。  
2. 平成29年度、平成28年度ともに、新基準で計算した数字です。

以上の結果、資金収支は 13 億円のプラスとなりましたが、預かり金等の歳計外現金が 14 億円のマイナスとなったため、年度末の現金預金残高は 91 億円となりました。